

えど友ホームページ
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会会報

目次	データで見る友の会の構成 1	えど友サークルだより 6
	友の会セミナー『落語の起源と寄席のはじまり』 2	えど友プラザ 特集「私の昭和・東京」その3... 7~9
	友の会セミナー『映像史の視点一写された明治の東京』... 3	『清洲橋と釘』/『「昭和」東京 ありがとう』/ 『集団疎開前後』『歳の市およびガサ市考』
	特別観覧会『始皇帝と彩色兵馬俑展』 4	企画展ご案内 / 会議・会合日誌 9
	江戸博クリップ『漱石の憂うつ』 4	江戸博境界⑫ [相撲博物館] と [ちゃんこ・巴潟] ... 10
	見学会『聖橋をはさんで歩く神田・御茶の水境界』... 5	催事案内 / 会員優待のお知らせ 11~12
	ご意見・ご要望にお答えします 6	



友の会の構成

会員の男女別、年代別など

入会ならびに更新時に会員の皆さんからお聞きしている性別・年齢・住所・入会日等のデータを集計(8月末時点)しましたので、その結果についてお知らせします。

なお、図・表に「2003年9月」とあるのは、当時実施した「友の会の実態調査」(以下「実態調査」と略。回収数535人、回収率60.2%)の数値で、参考までに掲載しました。

◆男女比は3対1

「男性」66.4% (734人)、「女性」33.6% (372人) ですから、会員の3人に1人が女性ということになります。この割合は3年前に実施した「実態調査」とほとんど変わりません。



◆60代・70代で全体の6割

「60代」が最も多く33.5% (371人)、次いで「70代」25.8% (285人)、「50代」17.8% (197人)と続き、「80歳以上」の方がたも7.0% (77人)を数えています。「実態調査」と比べ

「80歳以上」の割合がやや多くなっていますが、高齢の方はアンケートの回答を敬遠されたのかもしれませんが。

なお、平均年齢は63.9歳です。

	2006 / 8月末		2003 / 9月	
	人数	%	人数	%
30歳未満	7	0.6	6	1.1
30代	45	4.1	19	3.6
40代	68	6.1	43	8.0
50代	197	17.8	90	16.8
60代	371	33.5	202	37.8
70代	285	25.8	149	27.9
80歳以上	77	7.0	17	3.2
無回答	56	5.1	9	1.7
計	1,106	100.0	535	100.0
平均年齢	63.9歳	-	63歳	-

◆3人に2人が都民

住居別では、「東京都」方が全体の67.8% (750人)で、内訳は「23区内」が60.0% (664人)、「都下」が7.8% (86人)です。次いで、「千葉県」12.7% (141人)、「埼玉県」8.4% (93人)、「神奈川県」6.1% (68人)の順です。「千葉県」在住者がやや多いのは、江戸博のある両国駅が総武線の沿線にあるからだと思われます。

なお、1都3県以外の「その他」の地域の人でも54人(4.9%)を数えています。「実態調査」との比較ではやや都民が減り、3県が増えています。

	2006 / 8月末		2003 / 9月	
	人数	%	人数	%
23区内	664	60.0	334	62.4
都下	86	7.8	42	7.9
単に東京	-	-	4	0.7
(東京都計)	750	67.8	380	71.0
埼玉県	93	8.4	39	7.3
千葉県	141	12.7	54	10.1
神奈川県	68	6.1	28	5.2
(3県計)	302	27.3	121	22.6
その他	54	4.9	24	4.5
無回答	-	-	10	1.9
計	1,106	100.0	535	100.0

◆4人に1人が「友の会誕生の年」に

「2001年入会者」が最も多く26.3% (291人) ですから、4人に1人が友の会が誕生した年に入会されています。次いで多いのが本年、「2006年入会者」で20.6% (228人) となっています。

ちなみに、2001年4月期の会員が549人でしたから、ほぼ半数強の人が継続して会員になっているものと推測されます。



(今後は毎年9月に、会員構成についてお知らせいたします)

【報告】 広報部会・菅沼和男
集計：事務局・藤井啓子

落語の起源と寄席のはじまり

講師 山本進さん (芸能史研究家)



落語の起源

落語の起源には諸説あり、300年前という人も400年前という人もいます。どこでどうとらえるかによりませんが、人間が言葉を持ったときから面白おかしく話した人はたくさんいたと思われる。それが職業としてお金をいただき特定の場所で話すという芸になるまでにはかなりの時間がかかっただろうと思います。

お配りした資料では約400年前ということで、安土桃山時代の浄土宗の僧侶・安楽庵策伝を落語の始まりとしています。単に面白おかしい話というともっとずっと古いこととなります。宇治大納言隆国という人が話を集めた「宇治拾遺物語」が落語のもとだという説があります。

もっと古く竹取物語にかぐや姫の話があります。かぐや姫は時の帝の求愛まで受けながら、月に帰らなければいけないので、不老長寿の「不死の薬」を置いて月に帰ることになります。それを受け取った帝は、「会うことも涙に浮かぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ」といって嘆き、この薬を駿河の国の富士山頂で燃してしまえということになったのです。富士と不死の掛詞が、この話の「さげ=おち」になっているので、つまり、竹取物語全体がおちのある落語ではないかということになります。

曾呂利新左衛門と安楽庵策伝

時代を遡るときがなくなるのですが、通説として戦国大名がお伽衆として話のうまい人を雇ったのが始まりと

いう説が一般的です。太閤秀吉に仕えていた曾呂利新左衛門という人などがよく知られています。寺の坊さんとか茶人とかに話のうまい人が多く、かがり火を焚き夜襲から身を守るために寝ずに番をしていた武士もこうした人たちの話によって退屈せずに過ごしたといえます。そうした中で、安楽庵策伝というお坊さんがいて、大変話が上手だったといわれ、この人は最後に京都の誓願寺の和尚となり、安楽庵という庵を作り過ごしました。晩年「醒睡笑」を書き上げ京都所司代に献呈しました。

「醒睡笑」の巻之一には、今でもよく高座にかけられる「子ほめ」の原形である「鈍副子」という話があります。その「子ほめ」を柳家小三治さんで聞いてみましょう。(ビデオで鑑賞)。

また「醒睡笑」の巻之六には「推はちがうた」という話が載っていますが、これは今「平林」といわれている噺のもとです。そのほか、「牛ほめ」「寝床」などいろいろの噺のもとがこの「醒睡笑」にみられます。

このあたりが落語の祖といわれています。ただこの策伝和尚、職業としての落語家とまではいえないようです。

全日本落語選手権大会

岐阜県長良川国際会議場で平成16年に第1回全日本学生落語選手権大会が開かれました。2,000人を超す人々が集まり、予選では29大学約100名の古典落語・新作落語・英語落語など熱演があり、決勝大会へは8人の代表が進み、立命館大学・筑波大学・琉球大学など、会場を大いに沸か

せていました。なぜ岐阜かというと、実は安楽庵策伝の生まれがこの地だからなのです。その策伝和尚が生まれて450年、この大会はその後引き続き毎年この地で開かれています。今年も2月に開かれ、北は北海道大学から南は九州大学まで36校が参加、私の後輩(東京大学)が優勝しました。

江戸の落語と寄席

職業としての噺家は上方の方が早く、延宝から天和にかけての1670年代京都では露の五郎兵衛という人が出ました。同様になにわの生國魂神社では米沢彦八という人が咄をはじめました。今でも大阪では毎年「彦八祭り」という落語家とファンのイベントが行われています。江戸では鹿野武左衛門という人が出ました。これは上方の「辻噺」に対して「座敷噺」といわれ、その内容は本になって出版されています。ところが元禄6年(1693)に、「そろりそろり」という奇病が流行するといううわさが立ち、南天と梅干の実が良く効くという風評が広がりました。めぐりめぐって鹿野はこの事件に連座して召し捕られ、大島へ島流しになってしまうのです。以来江戸の落語はぼったりと途絶えてしまいます。

それから100年ほど経って、天明6年(1786)烏亭焉馬という人が向島の料亭で話の会を行った記録があります。そして、この機運によって寛政10年(1798)ごろ初代三笑亭可楽、初代三遊亭圓生などが寄席興行を始めます。烏亭焉馬は江戸落語中興の祖と呼ばれています。

続いて、初代林家正蔵が両国橋近くに小屋を建て寄席経営を始めました。これが浮世絵に残っており、ここでいろいろな仕掛けをつくり怪談噺などを興行していました。この小屋の隣には義太夫小屋や芝居小屋や見世物小屋が並んでおり明治初めに取り払われるまで続いていたのです。

【記録】文・写真：広報部会・林榮二

映画の発明とその後の展開

アメリカ加州知事リーランド・スタンフォードは競馬好きな友人と賭けをしました。走る馬の4本の足が同時に地面を離れることがあるかどうかをです。1878年6月リーランドは写真家のエドワード・マイブリッジに馬の連続撮影を依頼します。マイブリッジは12台のカメラで(後に24台)撮影に成功します。

同年11月、仏科学雑誌『自然』に掲載されたマイブリッジの分解写真を見た生物学者エチュエンヌ・ジュール・マレイが衝撃を受け、彼をソルボンヌに呼びます。1882年1月、マレイは、助手ジョルジュ・ドメイニの協力を得て連続撮影用のカメラ「写真銃」続いて「クロノフォトグラフ」をつくり、今日の映画用カメラの原型を完成したのです。

エジソンとリュミエール兄弟

エジソン(米)とリュミエール兄弟(仏)、映画の発明者はどちらでしょうか。

トーマス・エジソンは、1889年10月6日、実験室で最初の動く映像の映写に成功(助手ウィリアム・ディクソンの手による)します。1891年「キネトスコープ(映写機)」「キネトグラフ(撮影機)」で特許を申請します。1891年、初のキネトスコープ館がニューヨークに開館し大きな反響を呼びました。キネトスコープは、大きな箱にフィルムを装填し、のぞき窓からフィルムそのものを拡大鏡で直接見る形式のものでした。その後キネトスコープはヨーロッパに持ち込まれます。

1895年2月13日、ルイとオーギュストのリュミエール兄弟は、撮影・現像・映写機能を持つ装置の特許を申請します。これが「シネマトグラフ」です。彼らはパリ国内産業振興会でシネマトグラフを公開します。続いて6月10日、リヨンで開かれたフランス写真会議では、前日船から降りてくる会員の

第3回江戸東京博物館友の会セミナー
— 映された明治の東京 —
映像史の視点
講師 深川英雄さん(駒沢女子大学教授)

2006



ちをしばり大もうけします。特許料を遅滞する興行師もいました。一方リュミエール兄弟は最初200台ほどシネマトグラフを作りますが全部自社で管理します。世界のしかるべき国に代理人を置き撮影・映写の管理権を与え、若い野心的なカメラマンを育て、シネマトグラフを持たせて世界中に派遣します。

映された明治の日本・東京

京都生まれの稲畑勝太郎は15歳の時、京都府派遣の留学生に選ばれリヨンで染色技術を学びます。リヨンの名門工業学校でリュミエール兄弟の兄と同級生でした。その後、3回日にリヨンに行った時にシネマトグラフの公開に出会い魅了されます。リュミエールは日本での代理人に稲畑を選びシネマトグラフを2台提供します。稲畑はコンスタンジレルというカメラマンを同行し帰国します。日本での最初の上映は明治30年(1897)2月の大阪でした。

その後、ガブリエル・ヴェールというカメラマンも日本で撮影活動を行います。被写体は東京・京都など明治の日本の風景や風俗、歌舞伎役者、芸者などです。撮影した数は30数本。

当時の映画は1本がせいぜい1分位の短いものですが、明治の日本の様子をよくとらえています。時々テレビなどに映される無声映画のぎこちない動きとは違い、もっと自然な動きです。これはおそらくカメラマンが丁寧に手で撮影機をまわしたからだと思われる。

【文責】 広報部会・岡橋園子
写真・同・佐藤幸彦

姿を撮影し、会議当日にはそれを上映して会員を驚かせました。エジソンのぞき窓方式と違い、オープンにスクリーンに映写する形式でした。

1895年12月28日、パリ・キャブシーヌ街14番地、グランカフェ「サロン・インディアン」でシネマトグラフが初めて一般公開されます。会場は120席ほど、入場料1フランでした。1日4回上映され初日の観客数は35人でしたが評判になり、2日目から1週間で延べ3,000人以上の観客がこれを見ました。

エジソンはシネマトグラフに刺激され1896年スクリーン映写用の「ヴァイタスコープ」(助手トマス・アーマットの手による)を開発します。

特許権と代理人方式

しかし発明家や技術屋は、映画の面白さを知った大衆の要望についていけなくなり、映画は興行師の手に移ります。興行師は、制作、配給、興行を行います。自分たちの映画館を作り、沢山の人の集め、入場料を取って週に何度か新しい映像をここで上映しました。エジソンは多額の特許料を取ってヴァイタスコープを使用する興行師た

始皇帝と彩色兵馬俑展 ～司馬遷『史記』 の世界～



特別展「始皇帝と彩色兵馬俑展～司馬遷『史記』の世界～」が8月1日から10月9日まで江戸博1階企画展示室で開催されました。この特別展の友の会会員を対象とした特別観覧会が8月8日、17時30分から開催されました。参加者は160名以上。大変な人気でした。

特別観覧会は、はじめに1階映像ホールで江戸博学芸員の江里口友子さ

んによる映像を使つての「見どころ解説」を聞き、そのあと企画展示室での展示見学会が行われました。江里口さんの解説のおかげで、参加者は見学のポイントを心得て、展示物を見ることができたようです。

「始皇帝と彩色兵馬俑展」は、サブタイトルに「司馬遷『史記』の世界」とあり、特別展開催に当たり発行されたカタログに「本観覧会は、『史記』を背景に、最新の文物資料を展覧して文献史学と考古学の接点を探り、新たな歴史像を示そうとするものです」と紹介されているように、春秋・戦国時代から前漢・武帝までの約700年間の各時代を代表する彫塑、装飾品、武具、生活用品、建物遺跡などが紹介されました。とくに剥落の危険から中国でも常設公開していないという「彩色兵馬俑」が展示され、本特別展の話題の中心となりました。

その彩色兵馬俑「跪射俑」は、片ひざをつき弩(ボウガン)を構えた兵士の像で、近年発見されたオリジナルの彩色が残る兵馬俑の中で最も状態がよいもののひとつということです。「跪射俑」はガラスケースに入れられ展

示室内の中央に展示されていました。したがって、「跪射俑」は四方から見ることができ、全体の彩色の様子はもちろん、ひざをついた側の足がつま先で体を支えていて、そのはいている靴の裏の模様(滑り止め)まで細かく見ることができました。

展示された俑では、太ったたくましい男性の「百戯(力士)俑」、鎧を着た兵士俑「鎧甲武士俑」、両手を前で組んだ姿勢で立つ役人「文官俑」、戦車を操縦する御者「御手俑」、そして威風堂々たる「將軍俑」など、いずれも180～200センチもあり、このような俑が何千も、しかも整然と並んだ形で発見されたこと、そのスケールの大きさに改めて驚かされます。このほか、純金製の帯鉤(バックル)「龍首蟠龍金帯鉤」、虎の形をした割符の一種「金虎符」、金の柄の鉄剣など春秋時代あるいは戦国時代の豪華な装飾品も展示され、その精巧なつくりと美しさにも驚嘆させられました。

展示品は日本初公開を含む約120件、この貴重な特別展を参加者はじっくりと見学することができました。

【取材】文・写真：広報部会・大石憲一



江戸博クリップ

漱石の憂うつ

この夏、イギリスの博物館が主宰するプロジェクトに参加し、資料の調査や展覧会の準備のために、1カ月間イギリスに滞在しました。その間、仕事の後の時間や休日を利用して、明治の文豪・夏目漱石が、ロンドン留学時代に暮した下宿先、全5箇所を訪ねました。

漱石は1900年10月から1902年の12月まで、英語英文学を研究する国費留学生として、ロンドンで生活をしています。最初のうちは、交友の和を広げ、異国の空気を楽しんでいたようですが、次第に内にこもるようにな

り、帰国する頃にはノイローゼに陥ってしまいました。

そのような漱石の心の変化を追って訪ねた下宿先。残念ながら、ロンドン到着直後に投宿したホテルと3番目の下宿先は、工事中だったり、すでに新しい建物に変わっていたりして、見ることができませんでした。しかし、他の下宿先は、手を加えられながらも当時のまま残っており、かつての漱石の生活をしのぶことができます。そのうちのひとつ、チェイス街にある漱石最後の下宿先には、著名人が住んでいたことを示すブルー・ブランクが取り付

学芸員 橋本由起子

けられています。イギリスでの漱石の知名度は意外に低く、漱石の名前を知る人はほとんどいませんでしたが、数年前にこのプレートがつけられたことで、今後イギリスでも漱石作品を読む人が増えていくことが期待されます。しかし、ロンドンでの生活を「尤も不愉快の二年だった」と述懐する漱石にとって、精神的苦境にあった最後の下宿先が顕彰されていることは、複雑な心持がするかもしれません。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

聖橋をはさんで歩く神田・御茶の水界限

<神田・御茶の水を歩く>

9月30日(土)、平成18年の第3回見学会「神田・御茶の水を歩く」が開催されました。今回の見学会参加者は56名。JR御茶ノ水駅聖橋口前に集合し4班に分かれて出発しました。

一行が向かった最初の見学地は集合場所のすぐ目の前、信号を渡ったところにある狂歌で名高い大田南畝(蜀山人)終焉の地。植込みの中にあるこの碑は教えてもらわなければそのまま通り過ぎてしまいそうな場所でした。続いて渡った信号を戻り、本郷通りを少し下った右手にあるニコライ堂に向かいました。大主教カサーツキン・ニコライが明治17年(1884)から同24年(1891)にかけて建立したビザンチン風の建物で、正しくは日本ハリスト正教会教団復活大聖堂というそうです。本来ならば時間をかけてじっくりと見学したいところでしたが、この先まだまだたくさんのお見学場所があり、次の見学場所へ移動。

ニコライ堂から日本大学病院、杏雲堂病院を経て、御茶ノ水橋から下ってくる明大通りへ出てくると、通りの向こうが明治大学のアカデミーコモン。ここに明治大学博物館が併設されていますが、博物館を訪れる前に杏雲堂病院の敷地内にある大久保彦左衛門屋敷跡の碑を見学しました。この碑も蜀山人の碑と同様に植込みの中に包まれたような形で立てられており、たいへん人通りの多い場所ですが、教えてもら



▲樹木の多い湯島聖堂

わなければそのまま通り過ぎてしまいそうな屋敷跡の碑でした。そういう意味でこの見学会は知る楽しみを教えてもらえる楽しい会といえるでしょう。

さて、明大通りを渡って明治大学博物館へ。ここで若干の時間をとり各自自由に展示品を見学することにしました。平成16年3月に竣工したアカデミーコモンの地下1、2階に設けられた博物館には伝統的工業製品の製造・可飾技法、刑事関係資料・古文書、考古資料が多数展示されています。ここは改めてじっくり見学したい博物館でした。



▲神田明神(上)と銭形平次の碑(下)

そしてすぐ近くの山の上ホテルを経て夏日漱石の記念碑へ。漱石は市谷小学校から千代田区猿樂町の錦華小学校に転校(明治11年・1878)。錦華小学校は現在少子化の影響で近隣の小学校と合併して御茶の水小学校となっていますが、校庭の道路に面したところに「吾輩は猫である名前はまだ無い」と刻まれた碑が建てられています。

この漱石の碑を見学後に山の上ホテルを再び経由して、御茶ノ水駅前の「御茶の水」の碑へ向かいましたが、このコースが今回一番高低差のある部分で、少々参加者の足の鍛錬になった



▲御茶の水駅聖橋口に集合

かもしれません。

御茶の水の碑から御茶ノ水橋を渡って神田川対岸の湯島聖堂へ。林羅山が上野忍ヶ丘に建てた孔子廟を五代將軍徳川綱吉が湯島に移し、後に昌平坂学問所となったところです。樹木の多い廟の内でしたがやぶ蚊が多く早々に神田明神へ。

正しくは神田神社。時代劇でおなじみの銭形平次は明神下の親分で親しまれ、あるいは美空ひばりの「神田明神すちゃらかちゃん…」でなじんだように一般的には明神様で親しまれている神社です。おこなわちのみこと すくなひこなのみこと大己貴命、少名彦名命、平将門命が祭られています。

この後、一行は男坂を下り文政7年(1824)から約17年間住んでいたという滝沢馬琴住居跡の碑を見学、更に万世橋へと向かいました。この間、超現代的「アキハバラ」の風俗ともすれ違うなど、歴史と現代を行ったり来たり不思議な感覚も味わいました。万世橋ではこの辺りの神田川南面一帯が「筋違八ツ小路」と呼ばれていたこと、後に取り壊され「めがね橋」と呼ばれた石造りの橋が掛けられ、現在の橋は関東大震災後に新しく掛けられたことなどの歴史を神田川を眺めつつ学びました。

見学会はこの後、旧万世橋駅跡、その近くに今も残る老舗料理屋街などを見学し解散しました。

なお、見学会の後に行われた懇親会には21人が参加し、和気あいあいのひと時を過ごしました。

【取材】文・写真：広報部会・大石憲一

◆◇ご意見・ご要望にお答えします◆◇

問 『えど友』プラザ・特集「私の昭和・東京」について…投稿者の氏名だけではどこの人かわかりません。せめて次号からは住所は記入してください。そうすればどこの人が書いたか、印象が深くなります。

答 前号の『えど友』No.33の6ページ「友の会からのお知らせ」でご案内しましたように、近頃は、個人情報の取り扱いについていろいろと配慮しなければならなくなりました。投稿者のなかには住所の掲載を望まれない方もあると思慮されます。編集部としては、たとえ市・区・町レベルまでであっても住所の掲載は今後とも差し控えたいと考えていますのでご了承ください。

問 友の会セミナーで、都内の「民俗行事」をテーマに上げてほしい。

問 友の会セミナーで、江戸時代の下水状況のレクチャー希望。

答 現在、平成18年度の各セミナーは計画どおり進行中です。その際、参加者のみなさんにアンケートのご協力を

お願いし、希望するテーマのジャンル、具体的テーマなどをお聞きしています。その結果を集約し来年度の企画に反映したいと考えておりますので、今回お寄せいただいたご意見もこの集約対象に加えさせていただき、今年度の参加状況や講師依頼の可能性なども勘案し、総合的に検討していきたいと思えます。

問 催事の申込みはメールでできないか。

答 現在、友の会では会専用の回線をもたず、特定の広報部会員の電話回線を使用させていただいてホームページを運用・管理しているのが現状です（ホームページのランニングコストは友の会負担）。また、友の会事務局と称してはいるものの、実情はアルバイトが週に2日、せいぜい12時間程度しか友の会事務局に詰めていません。こうした諸々の事情からメールでの申込みを受理するには至っていませんのでご了承ください。

なお、専用回線を有する江戸博においても、情報漏洩などセキュリティの観点から、各種の事業の申し込みは「はがき」に限定しています。

えど友 サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

◎活動概況

◆江戸・東京を巡る会：8月、9月は休会。

◆落語・講談を楽しむ会：8月26日(土)落語ビデオ・CD鑑賞・参加者8名。9月3日(日)千住界隈の落語ゆかりの地を散策・参加者5名。

◆藩史研究会：8月23日(水)庄内藩（別称鶴岡藩）史研究発表・参加者15名。9月28日(木)上総・大多喜藩史研究発表・参加者19名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：8月10日(木)、8月25日(金)、9月14日(木)9月22日(金)開催。参加者は各9名、9名、9名、8名。

◎スポット紹介 落語・講談を楽しむ会

8月26日(土)13時、友の会会議室をのぞいて見ました。毎月の「落語と講談を楽しむ会」はこの日第22回の会合ですから、ほぼ2年続いていることとなります。現在会員が20名で、この日は8名全員男性の出席でした。会員数はわりあい増減し、出入りは女性会員に多いそうです。この日は古今亭志ん生の「巖流島」と「舟徳」をそれぞれビデオとCDで鑑賞しました。この会の世話人・鈴木秀明さんの解説資料が用意されていますが、鈴木さんの解説というよりは皆さんの対話集会のような進め方になります。会員は、皆さん相当な落語講談通とお見受けしま

した。

この会は次回の9月3日に両国から水上バスで隅田川を千住までさかのぼり、北千住、千住大橋、南千住を散策する予定



▲世話人の鈴木秀明さん

です。この日の「巖流島」も「舟徳」もともに隅田川が出てくる斬で、次回の予習というわけではないが、次回とセットになっているのでした。このように隔月に落語講談に関係ある場所を散策し、時には散策の後で実際に高座を聴き、その前月には予めビデオ等で鑑賞する、というスケジュールが定着しているそうです。

さてこの日の会合、志ん生の二席を鑑賞し、雑談をして16時前頃解散しました。私もこの会合の中に居て、もっと全員が主体的に関われないだろうか、などこの会のあり方を考えて見たのですが、これは大変難しいことに気がつきました。「落語と講談を楽しむ」人々は、暇があれば落語と講談を聞いて楽しみたい人々であろうと思います。いわば受動的な趣味で、しかも一人一人好みも違い、それぞれが自分の世界を持っているように感じられました。そんな人たちがグループをつくって一人よりもっと楽しもうというのはとても難しいと思ったのです。私などはなかなかいいアイデアが浮かんでできません。こういう会をずっと続けるには鈴木さんのような人が必要であり、これをボランティアというのだらうと思いました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

特集

<私の昭和・東京> その3

清洲橋と釘

大山吉一

清洲橋は美しい。ダーク・ブルーの色彩で、チェーンケーブルの曲線は上から見ても下から見ても美しい。

でも私には「ニガイ」体験があります。

そう 清洲橋はいつ頃どうゆう理由で架けられたのか、その方に興味があり調べて見ました。

清洲橋は関東大震災の復興事業として計画され、昭和3年(1928)3月に完成されました。この橋は当時、世界一美しいといわれたドイツのケルンにあるライン河の吊橋を参考にして設計されました。

橋の親柱の際にある、プレートに土木学会選奨の土木遺産として永代橋とともに「帝都を飾るツイン・ゲート(清洲橋)」とあります。

長さ186.6m、幅22mの自碇式の吊橋ですが、姿のわりには鋼材の使用量は永代橋より20%も多くて女性的な橋と言われていますが、ちょっと太りすぎの美人でしょう。コストの面から見ますと隅田川に架かっている橋梁(鉄道橋を除く)は全部で25橋ありますが、一番コストが掛かっています。当時のお金で321万円です。これは両国橋が3本も架けられる金額です。

「ニガイ」体験のことですが、昭和25年(1950)頃の下町はまだ焼け跡が方々に残っていました。本所より浜町の現場に建前の材木を荷馬車に満載して清洲橋にさしかかりました。

当時は道路もデコボコで橋と道路の継ぎ日には10cm位の段差がありました。そして荷馬車がこの継ぎ日に「ガ



▲今の清洲橋(写真:筆者)

タン」とはまり、積荷の上に乗せてあった釘箱があつと言う間に地上に落下しました。

さあ大変です。当時は釘一本・ガラス一枚が大切な時代です。釘箱には大小8種類の長さの違う釘が入っていました。夏のジリジリした暑い日には、いつくばって1本残らず拾い集めて、それを分別する。今思うと清洲橋は「ニガイ橋」です。

「昭和」「東京」ありがとう

桐井聡男

「昭和」というと、すでに遠い記憶しか残っていませんが、わずか18年前のことです。東京で生まれ、人生の大部分をこの東京で過ごしてきた自分にとっては、時の流れほど早くて怖いものはありません。

町を歩いてみても、いつの間にか大きなビルが現れ、道ができて、ここで三角ベースの野球を楽しんだという思い出すら消されようとしています。確実に記憶に残っているのは、「上野松坂屋」の焼夷弾しょういだんの穴跡です。周りにロープを巡らし、立入禁止の立札があつたことや、近くの上野動物園は、入場料の代りに飼料となるカボチャや芋の皮茎を持参すると見物できたというケースです。

今では都内有数の橋となっている

船堀橋ですが、ようやく板の橋がかり、川は上り方向と下り方向が午前と午後とに分かれ、大雨や台風時には通行止めでした。その少し上流の小松川橋の下には水泳の訓練場もあり、確か1~2度泳いだこともあります。これらは東京のごく一部、下町全体ではもともと多くの変化があつたはずで、例えば都庁のある西新宿は淀橋という名前であり、成子坂・追分という地名も生きていました。都内全体ではもともと多くの変化があります。大田区の方も、道塚・女塚という町名は失われています。町が成長し、変化している速さは、過去の100年が現在の1年に相当すると言われていました。

失ったもの、変ってきたものは、それだけでしょうか。町の変化のスピードに合わせて人情も変化してきたかも知れません。新聞でみる青少年の犯罪の多発がその例かも知れません。いまふり返ると、戦後の給食の始まる前、弁当を持たない友人に貧しい弁当の半分を渡し、子供心に人情というものを学んだのも昭和という時代でした。

失ったもの、新しいものの出現、それが変化というものかも知れません。その中で失ってはいけないものも沢山あるはずで、過去は訂正することはできませんが、明日はどのようにも作

ることができます。いずれにしても筆舌に尽くし難い苦勞のなかで生き延びたのです。ですから、「昭和」ありがとう「東京」ありがとう、と思っております。

集団疎開の前後

小山治夫

今から65年以上前のことである。父とともに近くの大通りを流れる、提灯行列の光を高揚した気分で追っていた。そんな記憶がおぼろげに残っている。当時王子(今の北)区に住み、小学校に入学した頃のことである。今思えば、皇紀2600年の祝賀行事の一角であった。

その後、大東亜戦争と教えられた第二次世界大戦に突入。昭和19年(1944)には都市部において疎開がすみ、縁故疎開者を除き小学生は学校単位で集団疎開が行われた。行った先は、群馬県伊香保温泉であった。3年生だった妹も一緒だったところからみると、初年度は3年生から6年生までの4学年だったように思う。親元を離れての集団生活が始まったわけである。期間は、およそ1年3か月であったが、その間、食料・燃料の確保、衛生・健康管理、学習指導、集団生活の維持など学童の生活管理全般を任せられた方々の責任の重さとお苦勞は、筆舌に尽くせないものがあつたと考えられる。特に、担任の先生と寮母さんには、心からの感謝をお伝えしたいと考えている。

学童の側から見ても、程度の強弱はあれその後の人生に、大きな影響をもたらしたように感じられるのである。ひとたび親元を離れての生活ともなれば、これまでの地域社会のしがらみもなければ、親兄弟の影響力もなく、全く新しい人間関係の中において切磋琢磨する以外にないことを学ぶこととなったからである。

昭和20年(1945)には6年生になっていた。そして8月15日、先生、寮

母さん以下一同広間に集合、終戦の詔勅を拝聴し、容易ならざる事態に立ち至ったことを、キレギレで良く聞こえないラジオ放送を通じて、子供ながらに知ったのである。当時、不穏な風評もあり、小遣い銭をかき集め刃物をひそかに購入したのである。12歳の少年のことであり、今思えばゾッとするような話であるが、当時の国民教育のなせる業であろうか心の澱のように記憶に残っているのである。

まもなく、東京に戻ってきた。日本晴れの気持ちのよい日であった。汽車が上野駅に着いて最初に気付いたのは、見通しの良さであった。視界を遮る物もない一面の焼け野原。そして電車を降りた下十条(今の東十条)駅では、赤く焼けただれた電車の列であった。

その後の学校生活は、先生の指示に従って教科書の不都合箇所を墨で消すこと、併設されていた高等科で使用したものであろうか軍事教練用の木銃をのこぎりで引くことから始まったが、家庭生活の困難とは異なり総じて穏やかなものであった。

年が明けて昭和21年(1946)中学に入学。最初に自分の小遣いで買った本は、駅の売店でしかも日本国憲法であった。新しい国の最高法規を手に入れたという気で、中学生は得意満面であった。他愛ないものである。あれから60年、月日の経つのは早いものである。いま憲法改正論議が取り沙汰されようとしている。

もう何年も前のことになるが、收藏品として学童の疎開先へ送った荷札などの展示が行われていた。何気ない展示であったとしても、それを見た感動は、忘れることはないであろう。今の東京を支える心を大切に、江戸東京博物館のさらなる発展を願うものである。

3回にわたってお送りしました特集「私の昭和・東京」は今回でひとまず終りとします。多くの投稿ありがとうございました。

歳の市およびガサ市考

若松謙二

歳の市とガサ市は江戸時代から密接な成り立ちをもっていた。どちらが古い起源をもっていたのかは不明だが、二つの市は年末に浅草寺境内や隣接する浅草神社(俗な呼称で三社様)の敷地内で行われた。現在も年末ににぎわう羽子板市は、歳の市に含まれる。歳の市の様相は江戸・明治・大正と時代が経過するに従って相当変化した。江戸から明治にかけては、百貨市であったようだ。年末から正月を迎えるために欠かせない日用品すべてが揃っていた。正月餅つきの白杵、道具類などである。ちなみに、江戸時代長屋住まいの一般庶民は、現在のように神棚などを各家でまつていなかったようである。

現在は、歳の市といっても実情は羽子板市と何軒かの植木商と、あとはほとんど通常の露天商が商品にしている。暦・縁起物・食べ物屋である。

期日はガサ市が12月15日から始まり、歳の市は12月17日から三日間行われる。

ガサ市は今年から12月16日から始まり、12月28日に終了することに変更された。

昭和の初期までのガサ市は、12月15、16日と浅草寺境内で営業し、3日ほど間をおいて、神田の旧神田青果市場近くで20、21日と営業し、続いて芝の愛宕山(現、NHK放送博物館のあるところ)下で営業した。最終は、25日から両国回向院の界隈で大晦日まで市が開かれていたのである。その直前24日は、日本橋馬喰町近くの薬研堀不動尊の界隈で、正月用品の歳の市があり、そこで小売もおこなっていた。

ガサ市の商品は、各店が扱う品種によって大きく分けられている。業者の大部分が俗にガサといわれるワラ製品の業者である。神棚に飾るゴボウ締め。

玄関に下げる玉飾りなどである。ガサの語源はいろいろあるが、本当のところは分からない。俗説に、場所を大きく占めるということを「ガサぼる」とか、荒い対応をする者を「ガサツ」という表現があるので、これが近い語源かとも考えられる。その他に、草物の業者がある。草物とは、裏白(羊歯の葉)、ゆずり葉、だいだい、松などで、後は飾り伊勢海老と御幣や水引など紙製品の業者である。

ガサ市が浅草で始まり、神田、芝、両国と移動した理由は、交通機関や運搬手段が未発達な時代、江戸の下町の各所へ移動出張販売していたのである。当時も現在も顧客の多くはとび職である。とびの頭は、ワラと草物、海老、紙などの各部品を仕入れて、正月の飾りに組み立てたのである。東京での正月飾りの仕事は、とび職の町内頭の専業であった。現在もおこなわれている正月の飾り方は、元来が江戸だけの風習で、地方では全く異なった飾り方をしてきた。今は地方でも江戸飾りを模倣している。

昭和30年代初めまでは、ワラ物の製造は東京の足立、葛飾、江戸川や、神奈川県川崎近辺の米作農家の副業と

して行われた。現在は秋田県や新潟県など、相当遠いところでも製造されている。草物も同じく東京の近在農家と、千葉や神奈川など近県で生産され、東京に運ばれていたのである。伊勢海老は江戸時代当初から、武家の鎧櫃の飾りとして使われていた。徳川將軍家連枝と旗本直参は、徳川家康愛用の羊歯の具足にちなんで、羊歯の葉とともに供えられた。(参照・復元江戸生活図鑑・笹間良彦著・柏書房)

伊勢海老は、江戸では近世まで伊勢海老とは呼称していなかったようである。兜海老と言われていたようである。これは武家の飾りからの呼び方ではな

いだろうか。

伊勢海老は、江戸時代から昭和初期まで、房総、鎌倉、江ノ島、伊豆から船で日本橋魚河岸や後年の築地魚河岸に運ばれて来たのである。上記の品々は、すべて自家一族の変わらぬ繁栄と健康長寿を願う意味にちなんだものである。



企画展ご案内

荒木経惟—東京人生—

好評開催中
お見逃しなく!

荒木経惟は、現代日本を代表する写真家です。1960年代から40年以上にわたり、常に時代の先端を走り、また東京の変化をとらえ続けてきました。

本展では撮りおろし、未公開品を多数含む展示作品から、東京風景と時代の「顔」の移り変わりをご覧いただき、江戸博ならではの「芸術の秋」をお楽しみください。

開催期間 2006年10月17日(火)～12月24日(日)

会場 5階第2企画展示室および館内各所

*企画展は常設展観覧料(会員は無料)でご覧になれます。

◆役員会

8月10日(木)18時から開催。懸案事項についての中間報告ならびに決定を行った。パソコン導入については慎重意見があり、継続審議とした。また、会員名簿の集計について提案があり、了承された。出席9名。
9月14日(木)18時から開催。懸案事項の「会員適正規模」については、友の会のような組織が自ら云々するものではないとの結論に至った。「記念事業積立金の活用」については、タタキ台が提出されず、次回に結論を持ち越した。出席10名。

◆事業部会

8月3日(木)18時から開催。友の会

会議・会合日誌

2006/8～2006/9

セミナー実施時のアンケート結果、特別内覧会の打ち合わせ状況、バスツアーなどの報告があった。出席者13名。

9月7日(木)18時から開催。前回以降実施された各種催事の状況報告があった。友の会セミナーのアンケート内容について検討した。「肉筆浮世絵展・江戸の誘惑」の特別観覧会の日時が決まった旨報告があった。出席11名。

◆広報部会

8月16日(水)15時から開催。『え

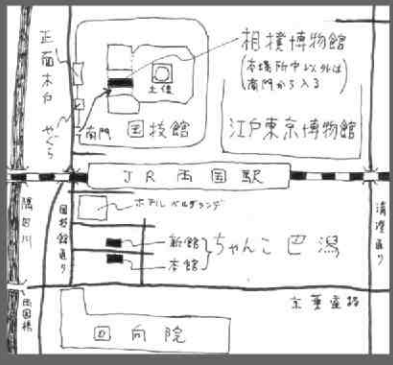
ど友』への投稿のあり方について部会としての考えをまとめた。

『えど友』34号および35号のトップ記事について検討した。出席10名。
9月20日(水)16時から開催。「わたしのお宝」を募集する場合の基準等について検討した。『えど友』34号の進行状況の報告があった。出席9名。

◆総務部会

8月30日(水)13時から開催。『えど友』No.33ほかの発送業務を行った。議題に入り役員会の報告、「入会案内パンフレット」の在庫の定期的チェックの実施などについて検討した。出席者11名。

【相撲博物館】と【ちゃんこ・巴湯】



12

相撲博物館

昭和29年(1954)に蔵前国技館ができたとき相撲博物館も開館。両国へ移ったのが昭和60年(1985)です。

初代館長である酒井忠正(旧姫路藩主の継養子1892～1971)が集めた2,000枚を数える錦絵や屏風絵、古い番付類、勝負付け(速報版)、星取表などのコレクションを基にした博物館です。その後、横綱の化粧まわしなど必ず1点は寄贈されたり、館が買い集めたものも多く、錦絵も約4,000枚に増えています。現在の館長は5代目で納屋幸喜(元横綱大鵬)です。

展示室が1室しかないので、2ヵ月ごとにテーマを決めて展示替えしていますが、これだけの展示が無料で見られるのはありがたい。ここ数年の主なテーマは、「明治天皇と相撲」「大相撲ポスター展」「江戸の大相撲」「相撲の装い」「柏嶋展」「相撲部屋」「行司の装束・軍配展」「館蔵屏風展」「地方場所展」など。入場者の多いのは、夏休みと東京本場所のある1月、5月、9月。外国人の見学が最近増えているということでした。夏休みの展示は子供向けのテーマで、今年は「相撲の基礎知識」。11月からは「第3回新収資料展」を



予定。出品は化粧回しや力士の明荷(つづら)、錦絵、大正時代の写真など。

壁に歴代横綱(古くは大関)の写真(古いものは錦絵)が並べて展示されています。これだけが常設で、下に横綱の名前、出身地、在位期間、優勝回数などが書かれています。この中に「優勝成績」ではなく、「優勝相当成績」とされているものがありました。これは、古い時代には個人の優勝が問題にされなかったのが、優勝という概念がなかったからだそうです。明治の頃は、東西のどちらが勝つか人々の最大関心事であり、さらにさかのぼって江戸の頃には、一番一番の勝負こそが大事で、人々は勝った強い相撲取りに拍手喝さいして満足していたということでした。また「大坂相撲」と書いてある横綱もいます。今は全国相撲ですが、大正末までは東京(江戸)のほかに大阪相撲もあったし、明治末までは京都相撲もありました。この館では江戸相撲が中心で、上方相撲の研究が今後の課題だということです。

また展示されていた番付表などを見ると、中央に必ず「蒙御免」の文字。不思議に思って尋ねてみたら、江戸時代、相撲を興行するには寺社奉行の許可が必要だったため、その許しを得たことを明らかにするためだそうです。建て看板にも板額にも「蒙御免」とあり、現在のものも名残ですべて「蒙御免」と書かれています。

力士のちょんまげや着物姿をはじめ、相撲界は江戸の姿が最も日常的に残っており、国技館とその境界は目の前で江戸の風情に触れることのできる貴重なところ。

博物館を見たあとは、国技館の売店をのぞくのも楽しい。6店あり、少しずつ商品が異なっています。

江戸博から徒歩4分。墨田区横綱1-3-28(両国国技館1階) 電話 03-3622-0366 開館時間 10時～16時半 休館日 土曜、日曜、祝日、年末年始のほか展示替えのために臨時休館。東京本場所中は毎日開館するが、見学は国技館入場者のみ。

ちゃんこ・巴湯

元小結巴湯こと9代日友綱親(とらふがた)が、定年退職後の昭和51年(1976)10月、同年4月まで友綱部屋があったところに、ちゃんこ屋を開店。今年でちよ



うど30周年です。店内には相撲絵などが貼られ、相撲甚句が流れて、相撲文化の香りが漂っています。

俗にいう「ちゃんこ」と寄せ鍋に違いはないが、相撲部屋の味をそのまま継承しているところが「ちゃんこ」たるゆえんとか。4種類の鍋のだしはすべて鶏がらでとります。しょうゆ味は、具が鶏肉と牛肉と野菜。塩味、みそ味、水炊きは、魚介に野菜。いわしのつみれを主にした塩味は友綱部屋独特のもので、みそ味は4種類のみそを合わせて味に深みをだしています。ポン酢で食べる水炊きはあっさりして夏向きです(2,940円)。

この店のよいところは、ランチで小鍋立てのちゃんこ定食(840円)が食べられること(平日のみ)。日替わりで毎日スープと具が違います。私たちが食べた日は代表的なちゃんこであるしょうゆ味。鶏肉がたっぷり入ってだしのきいたうす味。味、量ともに満足しました。平日以外でも昼に食べられる幕の内ちゃんこ(1,260円)と小結ちゃんこ(1,890円)は、鍋はサービスちゃんこと同じですが、小鉢や焼き魚、刺身、デザートなど付き物がふえます。他にてんぷら御膳(1,260円)、巴湯弁当(840円)などもあります。

江戸博から徒歩5分。墨田区両国2-17-6 電話 03-3632-5600 営業時間 11時半～14時、17時から22時。土曜、日曜、祝日 11時半～22時。

【取材】 文：広報部会・大野晴美 地図・写真：同・松原良

催事案内

友の会セミナー

第45回「江戸の狂歌ブームを探访する」

講師 川口順啓さん

◆狂歌が文芸の1ジャンルとしてまず出現したのは16世紀の上方狂歌ですが間もなく衰え、代わって登場したのが18世紀後半以降の江戸狂歌で、江戸の住民たちの喝さいを浴びました。その隆盛の原因や特色、人気作者たちのプロフィール等についてお話いただきます。

○講師略歴：かわぐち・じゅんけい

昭和32年運輸省に入省。昭和60年日本国有鉄道常務理事として国鉄改革にたざさわる。平成12年より17年までJR東海生涯学習財団常務理事。鉄道文学会副会長も務めている。著書に『日本の旅・千五百年』など。

・開催日：11月25日(土) 14:00～15:30

・申込締切：11月14日(火)必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】藤永昭彦(事業部会)

第46回「江戸の広場と民衆世界」

講師 小林信也さん

◆江戸の広場についてお話していただきます。江戸市中の各所には、多くの人々を集めてにぎわう広場がいくつもありました。江戸博のすぐ近くにも、江戸でもっとも有名な広場のひとつである両国橋広小路がありました。今回は『江戸名所図会』などの絵画史料も利用しながら江戸の広場の実態に迫り、江戸の庶民にとってなくてはならない存在だったこれらの広場の魅力とは何だったのかを探っていただきます。

○講師略歴：こばやし・しんや

昭和39年(1964)生まれ、広島県出身。現在は非常勤の大学講師(川村学園女子大学・都留文科大学・日本大学・東京女子大学など)。博士(文学・東京大学)。専門は江戸・東京を主なフィールドとする都市史研究。著書『江戸の民衆世界と近代化』(山川出版社)その他。

・開催日：12月23日(土・祝) 14:00～15:30

・申込締切：12月12日(火)必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】山口千恵子(事業部会)

第47～49回「江戸城展開連セミナー」

◆特別展「江戸城」開催を機に江戸博・原係長に3回にわたり、江戸城をめぐるテーマで講演をしていただくことになりました。各回ごとにお申込ください。

○第47回「江戸城の構造」1月9日(火) 14:00～15:30

○第48回「徳川家の系譜」1月16日(火) 14:00～15:30

○第49回「江戸における大名の暮らしと庭」

1月23日(火) 14:00～15:30

○講師 いずれも原史彦さん

(江戸博事業企画課展示係長・学芸員)

・申込締切：いずれも12月27日(水)必着

・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室

・定員：各100名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：各回 会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

古文書講座

第3期を1月から開講、申込受付中

古文書講座の今年度第3期を平成19年1月から開講します。第2期と同様、「入門編」「初級編(1)」「初級編(2)」の3講座です。ぜひご参加ください。

すでに第2期を受講されている方については、特に不参加の申し出のない限り、自動継続となりますので、お申込の必要はありませんが、別の講座を希望される場合には、改めてお申込が必要です。

◆第3期の日程など

*入門編 1月10日(水)、2月7日(水)、3月7日(水)

*初級編(1) 1月17日(水)、2月21日(水)、3月14日(水)

*初級編(2) 1月20日(土)、2月17日(土)、3月17日(土)

・開催時間：すべて14:00～16:00

・定員：各80名

・会場：江戸博1階会議室

・講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)、長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)、小松賢司さん(同)が交互に担当

・参加費：1講座1500円(初回当日払い・各講座とも)

・新規申込締切：各講座とも12月22日(金)必着

◆第2期・今後の日程(すべて申込の受付は終了)

*入門編 第2回 11/1(水) 第3回 12/13(水)

*初級編(1) 第2回 11/15(水) 第3回 12/20(水)

*初級編(1) 第2回 11/18(土) 第3回 12/16(土)

(注)入門編・第3回は12/6から12/13に変更されました。

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

特別観覧会

特別展 「江戸城」

◆太田道灌の築城 550 年と江戸博開館 15 周年を記念し、江戸城の全貌を紹介する展覧会です。江戸城は戦国時代のさまざまな変遷を経て、徳川将軍家の居城、さらに江戸幕府の中心となりました。権威の象徴であり、統治のための装置として機能した江戸城の実情について、図面や資料のほか模型や CG を駆使して、わかりやすく解説した展示です。

- ・開催日：現在 1 月 9 日(火)または 10 日(水)に予定されていますが、時間を含め詳細は未定です。申込された方には確定日時をご連絡します。
- ・申込締切：12 月 21 日(木)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1 階ホール／1 階企画展示室
- ・定員：100 名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・参加費：会員 500 円、同伴者 700 円
【企画担当責任者】伴野睦雄(事業部会)

見学会

「江戸四宿を歩く-千住その2」

◆ご好評いただきました千住北宿につづき、今回は千住大橋とその南側、「小千住」あるいは「千住南宿」一帯を歩きます。コースは南千住駅を起点に小塚原刑場跡周辺、旧日光街道に沿った上野戦争ゆかりの円通寺、史跡でいっばいの素盞雄神社、吉原の投げ込み寺として知られる淨閑寺などもりだくさんです。

- ・開催日：11 月 26 日(日) 12 時 45 分集合、ただし集まり次第時間前に順次出発します。
- ・集合場所：東京メトロ日比谷線・南千住駅南口
- ・申込締切：11 月 16 日(木)必着
- ・定員：90 名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- ・参加費：会員、同伴者とも 500 円(当日払い)
【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員 1 人 1 通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横綱 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお問い合わせいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

「友の会事務局」の執務日時のお知らせ

友の会の事務局には、専属職員が常駐しているわけではありません。友の会へのお問い合わせ等のお電話は次の日時にお願いします。原則・毎週水曜日と金曜日の 10 時～12 時、13 時～17 時です。

会員優待のお知らせ

好評開催中
お見逃しなく!

●特別展 ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展 「江戸の誘惑」

会 期 2006 年 10 月 21 日(土)～12 月 10 日(日)

休館日：毎週月曜日

図 録 定価 2,200 円(会員は 1 割引)

会 員：一般 650 円、65 歳以上 320 円、大・専門生 520 円

同伴者：一般 1,040 円、65 歳以上 520 円、大・専門生 830 円

次回予告

●特別展「江戸城」

会 期 2007 年 1 月 2 日(火)～3 月 4 日(日)

休館日：毎週月曜日。月曜日が祝日または振替休日の場合

は翌日。ただし、1 月 9 日(火)、15 日(月)は開館

*年始は 2 日から開館しますが、1 月 2 日(火)・3 日(水)は午前 11 時からの開館です。1 月 4 日(木)から通常どおり午前 9 時 30 分開館となります。



会報<えど友>第 34 号

平成 18 年 11 月 1 日発行(隔月奇数月 1 日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(副会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘、
岡本静雄、林榮治、大石憲一

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横綱 1-4-1 電話 03-3626-9910